

# 新出の中世私家集断簡三種

— 松葉切・広沢切・松木切 —

徳 植 俊 之

はじめに

古筆切研究では、一葉でも多くの新出断簡を集積していくことが重要である。本稿では、架蔵の古筆切の中から、中世私家集の新出断簡を三種紹介し、分析検討を試みようと思う。初めにとりあげる「松葉切」は、昭和二十五年に切断された断簡である。その後断簡として再び出現したものはわずかに二葉しかない。今回紹介するのは三葉目の切である。「広沢切」は伏見院御集の断簡であるが、こちらは膨大な量があり、その全体像もよくわからない。本稿では新出断簡を二葉紹介する。「松木切」は、京極派歌人の楊梅兼行の家集『兼行集』の断簡がよく知られるが、近年、それ以外の京極派歌人の家集の断簡も発見されている。本稿でも一葉新出断簡を紹介し、その書風や内容に関して検討したい。

## 一 松葉切

「松葉切」と呼ばれる古筆切がある。伝称筆者を龜山天皇とし、内容は『貞和百首』の徽安門院一条詠の断簡である。「松葉切」について最初に言及したのは樋口芳麻呂氏<sup>1)</sup>である。樋口氏は藤枝貞子氏御所蔵の断簡(軸装)を紹介し、本文を翻刻した上で、その和歌が『徽安門院一条集』の歌であることを明らかにした(断簡の図版はない)。

樋口氏の論考で明らかにされている切の情報をまとめておく。

〈断簡A〉

【寸法】 縦二八・三cm・横六・八cm

【料紙】 「美麗な料紙」

【箱書】 「伝龜山天皇宸翰 義則謹書」(吉澤義則氏の箱書き)

【その他】 添え状(由来書き)あり(後で掲出)。

【翻刻】一首三行書き。和歌は『徽安門院一条集』五十七番歌に該当。

かせにうくくものむらく

さむき日につもりもやらす

雪はちりつゝ

この『徽安門院一条集』は『貞和百首』の一条の歌を集めた家集であるが、現存本は百首中八十七首しか残っていない。樋口氏はこの現存本の形態と「松葉切」が断簡にされる前の原態が一致する可能性が高いと指摘している。

ところで、この「松葉切」のツレと思われる断簡(断簡B)が、別府節子氏の論考「『金剛院切・類切』等に関する考察」<sup>(2)</sup>の中に出てくる。それは、徽安門院一条による『貞和百首』の古筆切として紹介されているものである。別府氏は図版を添えて紹介しているが、それを見るとモノクロ図版ではあるもの、かなり豪華な裝飾料紙で、まさに「美麗な料紙」である。また寸法は「縦二八・〇cm・横四七・〇cm」で、縦の寸法が断簡Aとほぼ一致している。横が長いのは、この断簡が和歌六首分であることによる。<sup>(3)</sup>

さて、本文は『徽安門院一条集』の四五から五〇番歌までである。図版は判読しがたい箇所が多くあるので、別府氏の翻刻にしたがい、切の書様に合わせて掲出する。

〈断簡B〉

草かくれなきかはすむしの

こゑすみて庭しつまれる

ありあけの

影

まとたくあめにまきれて

きりくすかへにまれなる

ふけかたのこゑ

やまとをきゆふひのかけも

さなからにのきにをとする

秋のむら雨

しくれすさふたのもの日かけ

はれくもりおなしいな葉も

色そ

うつろふ

松とのみおもひしやまもむら

時雨そめゆくころそもみち

ともしる

さひしさのなかめはあすも

かくやあらむ秋とふゆとの

名はかはるとも

さて、さらにもう一葉新出の「松葉切」(断簡C・架感)

がある。これは、『徽安門院一条集』冒頭部分で、一から五番歌までの五首を載せる。断簡の書誌及び本文は次の通りである。また、由来を記した添え状も併せて掲載する。

〈断簡C・図版1〉

【寸法】縦二七・六cm・横四八・〇cm

【料紙】金銀切泊・金砂子散・銀泥下絵入美料紙

【箱書】二重箱 外箱古筆了信筆、内箱古澤義則筆

外箱表側「亀山天皇宸翰 名葉松葉切」

外箱内側「よものなかめ 五首 巻頭はるのうた 庚寅曆卯

月上旬 古筆了信拜書（花押）」

内箱表「松葉切よものなかめ」、裏「伝亀山天皇宸翰 義則

謹書」

【翻刻】

よものなかめいとやはるに

なりにけりむ月の日かす

いくかもあらぬ

に

そらの色はやゝかすめとも

ふるとしのおもかけのこる

雪のとを山

かせさゆるそのふのたけに

鶯のこゝろもとけぬけ（さ）の

はつこゑ

むめたにもまた花をそき

春の（いろ）よ鶯なきてかす

ま

さりせは

野へ見ればゆき（ま）あをめる

わかくさはうつもれなから

もえやそめけん

【添え状（由来書き）】

亀山院御宸翰御歌五首

金銀砂子切泊散し下繪模様御宸翰

料紙巻物十五枚之内よものなかめ

此宸翰はその昔徳川將軍家式部師範吉

良上野介が秘蔵たりしが元禄末越後上杉家

に傳はりたる天下之至寶なり昭和十二年重要

美術品に指定され兩三回公開あり世之好事

家之垂涎惜く能はざるものなり後又傳はり

て竹ヶ鼻町岩田仲右衛門氏之有に帰せり

こたびかゝる秘寶を一家一人之收藏するは遺憾

なりと勝考會員之切なる契めにより全巻を

十五葉に切竹ヶ鼻之古名松葉郷にちなみて

名葉松葉切と銘し之を各自に頒ちて珍

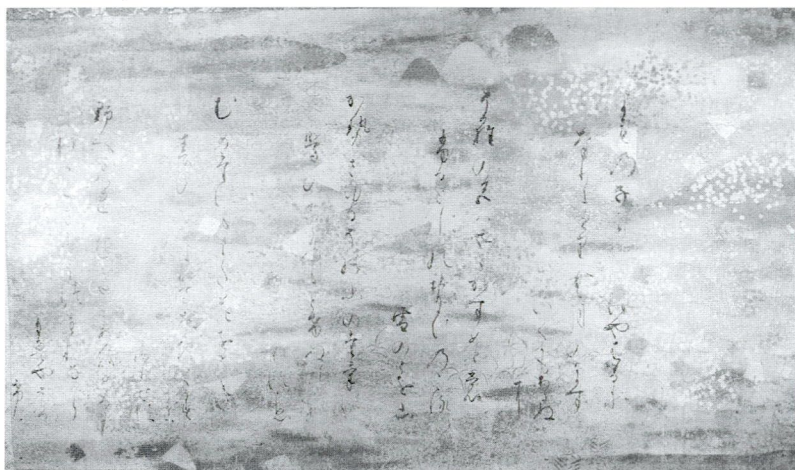
蔵することゝなれり依てその由来を誌す

昭和庚寅臘月

印（勝考會印）印（田中）

【添え状包紙】 表「松葉切 よものなかめ 印（勝考會印）」  
裏「印（八劔神社）」

〈図版1〉



鹿山院柳菴翰御歌五首

全銀砂印油紙下僧様様西家翰

柳菴先生知十五様一内十々々のこと

此菴翰はそる若徳川將軍の政師蒙旨

言上野介の祝儀より元福未起上終承

に傳はりて天下に玉言を承知知十二年重宣

善術を結定し西田公問方世に好奉

蒙し重宣猶能に承りて又傳はり

て時、真山出向仲長門氏一内一傳せ

く云が秘笈珠一葉一十枚藏す、空感

なりと勝長長官に切し是長より全書を

十五葉より竹と鼻に在る松菴翰らちこそ

名筆若松菴印を録し之を各自録す行

花してしるす依その由来に在る

昭和唐宮 臘月



本文は所々墨が剥落して判読できない箇所がある。推定される読みを（ ）で示した。

さて、まず注目されるのは、当断簡の由来を記した文書が添えられていることである。この添え状の二、三行目上部に八劔神社の社紋（笹）が押され、包紙には「八劔神社」の印も押されている。「八劔神社」は羽島市竹鼻町に現存する由

緒ある神社であり、神前で切断されるなど何らかの関わりがあったのだろう。添え状の日付「昭和庚寅臘月」は昭和二十五年十二月である。

さて、樋口氏も紹介しているとおり、添え状によれば、切断される前の松葉切は吉良上野介（吉良義央）から越後上杉家に伝来し（元禄末）、それが昭和十二年に重要美術品に指定され、その後竹が鼻町の岩田仲右衛門氏の所蔵するところとなった由である。さらに、昭和二十五年十二月に十五枚に分割され、「松葉切」と命名されたと記されている。吉良義央は上杉家の娘と婚姻を結んでおり、元禄十五年に赤穂事件で赤穂浪士に斬殺されているから、元禄末に上杉家に渡ったというのはあり得ない話ではない。

松葉切旧蔵者の岩田仲右衛門氏（一八九一〜一九六七）は、昭和四十二年に岐阜県羽島市の名誉市民称第一号を贈られた人物で、岩仲毛織株式会社取締役会長、岩仲ニット株式会社取締役などを歴任したほか、羽島市商工会長も務めた、羽島市竹鼻町の機業家、実業家である。由来書きにある「勝考會」については詳細不明である。

ところで、樋口氏はこの切断前の松葉切こそ、三条西実隆が永正十年（一五一三）に書写した『徽安門院一条集』（尊経閣本）の奥書に「貞和御詠歌也。正本一覽之次卒爾馳禿筆書様等大概如本写留之了」とある「正本」に該当するのではないかと推測している。別府氏は、当該断簡を含めて「金剛

院切」に類するような装飾料紙で和歌散らし書きという形態の古筆切がさまざま現存し、これらは女性が詠進した応製百首であると指摘しているが、当該断簡が非常に豪華な装飾料紙に書かれていることも考え合わせると、これが応製百首のいわゆる清書本であった可能性も十分考えられよう。

さて、添え状から推測されることでもう一点重要なことは、「全巻を十五葉に切」ったとある点である。断簡Bと断簡Cとは横の寸法がほぼ一致する。断簡Bは一紙六首であるのに対して、断簡Cが五首であるのは、巻頭部分なので一首分空けてあるからである。断簡Cを見る限り紙を継いだ形跡は見られないので、松葉切はもともと、横約四十八cmの紙を継いで装丁された卷子本であったと考えられる。それが十五枚あったとすれば、切断される前の歌数は八十九首であったことになる（巻頭のみ五首）。

しかし、これが実隆書写本の底本であったとすると、切断前の松葉切は八十七首であったことになる。とすれば最後の一紙は四首分しか残っていなかった可能性もある。末尾の一葉が出現することが望まれるところである。

もう一つ問題なのは、樋口氏が紹介した断簡Aが一首しかない点である。断簡Aの和歌は五七番歌であるので、一紙六首であるとする第十紙の四首目となる。これも十五枚の内と考えると、ここだけは一紙を少なくとも三分割したことになる、全体の歌数は現存本の八十七首に届かない。その点か

ら推測すると、藤枝氏御所蔵断簡を含む一紙は、全体が十五枚に分割された後、さらに少なくとも三枚以上に分割されたと考えざるを得ない。また、それらの断簡にも由来書きが添えられていたのかどうかも不明である。添え状の存在も含めて、この前後の断簡の出現が待たれるところである。

いずれにしても、松葉切は切断される前の段階で、すでに残欠本であった可能性が高い。実隆が一覧したのが松葉切であったとする樋口氏の推測が正しければ、その段階ですでに残欠本であったことになる。百首全体の欠損部が出現する可能性は低いと言わざるを得ない。

## 二 広沢切

伏見院御集の断簡「広沢切」は院自筆の御集切であり、その資料的価値の高さについては今さら言うまでもない。次田香澄氏によって資料収集の先鞭がつけられ、久保木哲夫・別府節子・石澤一志・久保木秀夫氏による本文集成（『伏見院御集集成』笠間書院。以下『集成』と略称する）も試みられているが、今なお新出の断簡は出現している。ここに紹介するのは、まさにその広沢切の新出断簡二葉である。

なお、以下伏見院の和歌と歌番号は『新編私家集大成』による（「大成+歌番号」で示す）。また、『新編私家集大成』には載らない広沢切の場合は『伏見院御集集成』により、『集成切+歌番号』で示す。なお、『新編私家集大成』から引

用した本文には、濁点のみ加えた。

さて、新出断簡の書誌と本文は次の通りである。

〈図版2・広沢A〉

【寸法】縦三〇・九cm・横一一・三cm、字高二三・五cm（一  
首目一行目）

【極札】（表）後伏見院 あか月は 印「琴山」（本家）

（裏）切 庚寅三 印「了音」

\*古筆了音（古筆家六代）在世中の「庚寅」は宝永七年（一七一〇）。

【翻刻】

冬暁（残）雁

あか月はしもさむからしふしみ山

かりたのおもにかりなきまさる

深夜千鳥

ともちとりおきつうら風さむからし

さよふけかたはこゑしきるなり

冬山家

人めたえくさ木もかれて山かけや

冬もなかはのにはもよろしき

〈図版3・広沢B〉

【寸法】縦三〇・〇cm・横七・五cm、字高二四・二cm（和歌  
一行目）

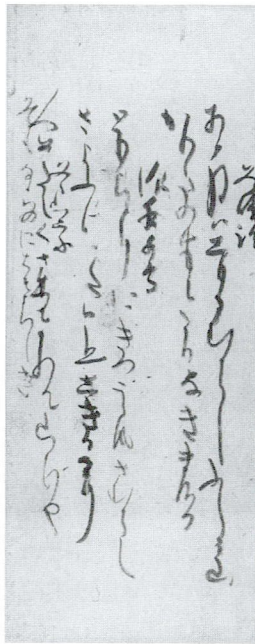
【極札】（表）後伏見院 雑／さよふかき 印（印文不読・初代朝倉茂入）

（裏）印「茂入道順」

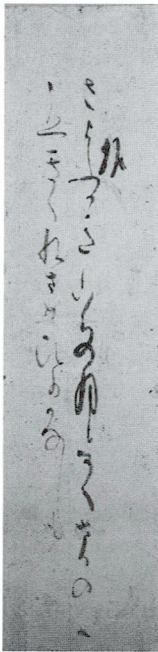
【翻刻】  
雑

さよふかき山ちの月になくとり  
のこゑきくねさめひとりかなしも

〈図版2・広沢A〉



〈図版3・広沢B〉



「広沢A」の二首目の和歌は、東京大学史料編纂所「谷森真男氏所蔵文書」の九首目（大成一五二・五・集成一四一九）と一致する。異同はない。一首目と三首目は新出歌である。広沢Bの和歌は、次田香澄氏が紹介した所蔵者未詳の断簡（集成切一六五）の八首目の歌と一致する。したがって、これらは重出歌ということになる。

さて、広沢切の文字は非常に読みにくく、図版2の広沢Aもかなり崩れてあって判読しにくい箇所が多い。最初の歌題も「冬暁雁」とも「冬残雁」とも判定しがたい。いずれも他に例のない歌題である。

ただし、伏見院には、

しもに<sup>し</sup>なく<sup>か</sup>かりが<sup>ね</sup>さ<sup>む</sup>し<sup>ふ</sup>し<sup>み</sup>や<sup>ま</sup>かり<sup>田</sup>のお<sup>も</sup>の<sup>冬</sup>  
の<sup>あ</sup>さ<sup>あ</sup>け  
〔冬〕、大成二二〇五

があり、使用語句や発想に類似点が見られる。また、「ふしみ山」は伏見院が好んで詠んだ地名で、組み合わされた素材も、「あら田」（大成六〇八）、「田のもの」（大成七二〇）、「霜」〔かりがね〕「かり田のおも」（大成二二〇五）、「田のもの」（集成切二二五）、「田のもの霧」（集成切一〇七—三）、「田のもの」（集成切一三三—二）と、本歌に見られる〔かり〕田との組み合わせが多く見いだされる。

また、後鳥羽院の歌に、

ながむればかり田の雪にゐる雁の友よぶこゑの寒き明ば  
の

〔同二年三月日吉卅首御会 冬〕・後鳥羽院御集一三四〇〕  
があり、「かり田」に鳴く冬の雁（残雁）の情景はよく詠ま  
れていたことが確認できる。

三首目の和歌の三句目は一応「山かけや」と読んでおく。  
伏見院の和歌には「やまかげ」と「庭」の組み合わせが多く  
見られる。

わかれつる木ずゑのいろもをしこめてひとつにくるゝ山  
かげの庭

〔夕〕・大成一〇八八〕

夜の雨のなごりのしづくのきにおちてくさ木しめれる山  
かげのには

〔山家〕・大成一一〇一〕

山かけや秋をくくりしにはのおもにまだ霜しらぬきくの  
色かな

〔冬〕・大成一四五七〕

山かけやかきほさびしきゆふぐれのあらしにめぐるには  
のみちぢば

〔庭落葉〕・大成一八七七〕

山かけや人ははらはぬにはのおもの木のはをよするあさ  
あらしかな

〔朝庭〕・大成一九七二〕

三首目の和歌の下旬は独特の表現で、今のところ他に用例  
を見いだせない。かなり速筆で崩して書いていることから、  
草稿的な要素は非常に強いと言えよう。

### 三 松木切

「松木切」は後宇多天皇を伝称筆者とし、『増補新撰古筆名  
葉集（安政五年版）』に、

松木切 奉書紙御自詠哥一行片カナニテ題アリ  
と記される名物切である。

「松木切」に関しては、岩佐美代子氏<sup>⑧</sup>、石澤一志氏<sup>⑨</sup>、別府  
節子氏<sup>⑩</sup>によって研究が進められ、その内容の判明するものは  
『兼行集』『為子集』『親子集』があり、加えて伏見院の詠草  
を書き抜いたものや「未詳初期京極派歌人の集」の断簡が含  
まれていること<sup>⑪</sup>、さらにそれらは勅撰事業の資料のために  
「原資料から再編纂された個人別の小家集」と見られること<sup>⑫</sup>、  
そして「松木切」はその原本であった可能性の高いことなど  
が指摘されている。またその書写形式は、「初め一首二行書  
で書写していたものを途中から一首一行書に書写の形式を改  
めるといふ変則的な書写態度<sup>⑬</sup>」であることが石澤氏によって  
明らかにされている。一方、その書風については別府氏によっ  
て二種の筆跡のあることが明らかにされ、そのうちの一種は  
伏見院の筆跡である可能性の高いことが指摘されている<sup>⑭</sup>。

さて、ここに掲出する断簡は、その「松木切」の新出断簡  
である。以下、書誌及び本文を記す。

〈図版4・松木切〉

【寸法】縦三三・〇cm・横二二・六cm、字高二五・〇（二行  
目）、二六・〇cm（四行目）

【極札】外包紙 「後宇多天皇 後詠草巻物残歛／春霞

柳 年暮」（了信の筆跡か）

極札A



(表) 後宇多院 のもやまも 印「琴山」(分家)

(裏) なし

\* 分家三代古筆了仲の極札

極札 B

(表) 後宇多天皇 のもやまもかすみ 印「琴山」(本家)

(裏) 御巻物切 春霞柳年のくれ也 / 歌三首 戊辰一 印

「了信」

\* 戊辰一は、昭和三年(一九二八)一月と思われる。

\* そのほか、翻字等の書かれた「即色庵稿」(「即色庵」は了信の号)と印刷された便箋等が添えられている。

【翻刻】

のもやまもかすみはかりのいろにして  
またすくま<sup>(ママ)</sup>しきはるにそありける

やなき

めくみわたるやなきのこすゑはるあさみ  
なへてみとりのいろそまたしき

としのくれ

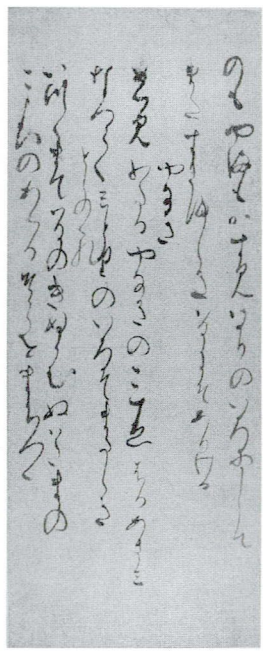
いつくまではるのきぬらむぬはたまの  
こよひのあくるそらをまちつゝ

さて、断簡の和歌であるが、三首とも出典未詳歌である。

一首二行書であることから、歌集の冒頭部である可能性が高く、和歌はすべて春の歌であるから、四季別に配列されている

たのであろう。

〈図版 4〉



当該断簡の筆跡は「広沢切」に見られる伏見院の書風に酷似している。八行目の「を」の字は別府論文でも広沢切との比較で酷似した字としてあげられているものに一致し、二・三行目の「き」も本稿図版3に見える「き」字と酷似し、ほかに、「ま」も下部をほとんど点のように筆先をまわすところなどが近似する。伏見院の書と認めてよいだろう。

和歌の表現を見ると、「一首目」「のもやまも」歌の二・三句と類似する表現が伏見院の歌、

ゆふぐれはかすみばかりの色になりてをちこちわかぬは  
るの山のは (「春山」・大成六三三五)

に見られ、二首目「めぐみわたる」歌の「木ずゑ……なべて  
みどりの」は、やはり伏見院詠に、

首夏の心を  
なつになる木ずゑはなべてみどりにて山ほとゝぎすはつ

ねまつころ (大成一二二二)

なつ木だちなべてみどりの色のうちにあさきあお葉ぞま  
れにまじれる (大成一二二二)

卯花

このごろよ木ずゑはなべてみどりにて かきねつゞきは  
うのはなのいろ (大成一三〇八)

と類似する表現が見られる。断定することはできないが、伏見院の詠草である可能性も捨てきれない。

以上のことから、当該断簡は伏見院の筆跡の可能性が高く、その内容は出典未詳歌ではあるが、伏見院の詠草であった可能性も含めて、別府氏の指摘する「初期京極派歌人の集」の断簡に該当すると言えよう。

おわりに

以上、中世私家集の新出断簡をめぐって、その内容の紹介に加え、若干の検討考察を試みた。中世和歌の新出断簡は、このようにまだ出現することが期待できる。ツレの少ないものはなかなかその全体像をつかむことが難しいが、こうした作業を地道に積み上げていくしかない。一葉でも多くの断簡が発見され公開されることが望まれるところである。

一 松葉切

(1) 「松葉切について」〔和歌史研究会会報〕第一〇〇号 平

成四年十二月)。以下、樋口論文の引用はすべてこの論文による。

(2) 『和歌と仮名のかたち 中世古筆の内容と書様』笠間書院・二〇一四年五月刊) 二三九頁。初出は『出光美術館研究紀要』第十五号・二〇一〇年一月。

なお、別府論文では「松葉切」の呼称は用いられておらず、また樋口論文への言及もない。

(3) 別府氏の紹介した古筆切はその後、京都の某古美術商の図録(平成三十年六月)にカラー図版で掲載され、以下の書誌的情報が掲載されている。

伝龜山天皇宸筆松葉切一軸

金銀切泊・金砂子散・銀泥下絵入美料紙 本紙27・5×47・3 纏 軸装 二重箱入 古筆了信・吉澤義則箱書

吉良上野介伝来

現物を見ていないのでなんとも断定はできないが、「吉良上野介伝来」としていることから、おそらく藤枝氏御所藏断簡同様、由来を記した添え状があったと思われる。

(4) 『羽島市制五十年史』六七五頁。

(5) 注2(前掲書) 二四〇頁。『金剛院切』に関する一考察―十四世紀の女性歌人による百首歌の懐紙の可能性―にも関連した指摘がある。

(6) 断簡Bの寸法等は注3参照。

二 広沢切

(7) 後鳥羽院以外の用例としては、次の和歌も見える。

花になく鳥とぞ見ゆる白雪のふるの刈田におつる雁がね

(公義集・一七九・「田残雁」)

あまつ雁かり田の霜にあさるなりいな葉におりし秋やわす

れぬ (沙玉和歌集・一八四・「冬鳥」)

また、時代はやや下るが『正徹千首』『残雁』題の次の歌もある。

いなくきに雪はならひて水さむきかり田をみれば雁独なく

(正徹千首・五八一・「残雁」)

### 三 松木切

(8) 「親子・兼行・為子集」(『京極派和歌の研究』改訂増補新装版二〇〇七年十二月刊)、初出「親子・兼行・為子集について」(『国語と国文学』昭和五十年十二月)

(9) 「伝後宇多天皇筆『松木切』へ『兼行集』断簡について」その原本性と現存諸本との関係」(『和歌文学研究』第七十六号・昭和十年六月)

(10) 「『松木切』の考察」(『和歌と仮名のかたち 中世古筆の内容と書様』笠間書院・二〇一四年五月刊)

(11) 注10。


(12) 注8。

(13) 注9。

(14) 注9。

(15) 注10。

(16) 本稿に図版で示した断簡から、「き」「ま」「は」の三文字を比較する。

			〈松木切〉
			〈広沢切〉